

# 海外研修の新たな可能性を探索する台湾研修プログラムの作成とその効果の可視化

## Taiwan Training Program: Exploring New Possibilities in Overseas Training and Visualizing Effectiveness

今村 康子、山田 大介

Yasuko Imamura and Daisuke Yamada

**要旨:** グローバルな舞台で活躍できる人材の育成が重要性を増す中、多摩大学グローバルスタディーズ学部では、全学生の海外訪問の機会の設定を目指している。本研究は、海外渡航プログラム増設に向けて、海外研修の新たな可能性を探索すべく、教員のアセットを活用した台湾研修プログラムを実施する。本研究の目的は、設計した台湾研修プログラムの記録、研修効果の測定、効果の可視化である。夏休みに6泊7日で台湾研修を行い、プログラムの設計、準備、運営、課題と留意点について記録した。研修におけるジェネリックスキルの成長を測定するため、「旅と学びの汎用ツール」と「IDGs 指標」の2つのツールを用いて、研修前後で参加者のジェネリックスキルの変化を測定し、参加者個々の変化、成長を示した。今後の課題は、本プログラムの改善とさらなる海外研修プログラムの探究、プログラム全体の効果測定と可視化である。

**キーワード:** ジェネリックスキル、変革的旅行体験、海外研修、内面的成長目標

**Abstract:** With the increasing importance of fostering globally active human resources, the School of Global Studies, Tama University, aims to provide opportunities for all students to visit abroad. This study will implement a training program in Taiwan to develop generic skills by leveraging faculty resources to explore new possibilities for overseas training. The purpose of this study is to document the program, measure the effectiveness of the training, and visualize the effects. The training program in Taiwan was conducted, and we documented the program design, preparation, operation, and considerations. To measure the growth of generic skills in the training, two tools, the Travel and Learning Generic Tool and the IDGs Indicators, were used to measure changes in participants' generic skills before and after the training. The results indicated changes and growth for each participant. Future research will focus on improving the Taiwan program, exploring additional overseas training opportunities, and measuring and visualizing the program's overall effectiveness.

**Keywords:** generic skill, transformative travel experience, overseas training, IDGs

## 1. はじめに

### 1.1 研究背景

2023 年閣議決定された第 4 期教育振興基本計画<sup>1</sup>の教育政策に関する 5 つの基本的な方針のひとつに、「グローバル化する社会の持続的な発展に向けて学び続ける人材の育成」がある。さらに、「日本や外国の言語や文化を理解し、日本への愛着や誇りを持ちつつ、グローバルな視野で活躍するための資質・能力の育成が求められており、コロナ禍で激減した日本人学生・生徒の海外留学や、より若年段階からの国際的な交流活動の推進、外国人留学生の受入れ環境、大学等のグローバル化の基盤・ルールの整備、外国語教育の充実、外国人への教育の充実、国際理解教育の推進などを図っていく必要がある。」と示されている。

しかしながら、外務省の一般旅券発行数と総務省の総人口の統計データをもとに一般社団法人日本旅行業協会(JATA)が算出した 2023 年の日本人の旅券保有率は、17.0%である(図 1)。前年の 17.1% からほぼ横ばいで、他国と比較しても旅券の保有率が極めて低い。JATA が「新成人へのパスポート無料配布を政府に要請していく」とのことが一部報道されるなど、日本人の海外渡航離れを背景に国際感覚を持つ人材育成に対する懸念の声が上がっている。

観光庁は、2023 年 1 月 11 日～2023 年 1 月 12 日に、全国の 19～25 歳男女 400 名に対し、「2023 年こそ海外旅行に行きたいと思うか」との調査を実施した。その結果を、表 1 で示す。「行きたいし、行こうと思っている」との回答は 19.7%にとどまり、57.3%が「行きたいと思わない」と回答している。大学生世代であっても海外渡航への興味・関心は高くない。一方、1～2 回海外旅行をしたことがある旅行経験者は、「行きたいし、行こうと思っている」の回答が 55.8%に増加する。このことから、大学の海外研修プログラムは、学生が海外の知識を得る機会を増やすだけでなく、海外渡航のきっかけとなり、海外留学へ誘引し、国際的な交流活動を促進すると考える。

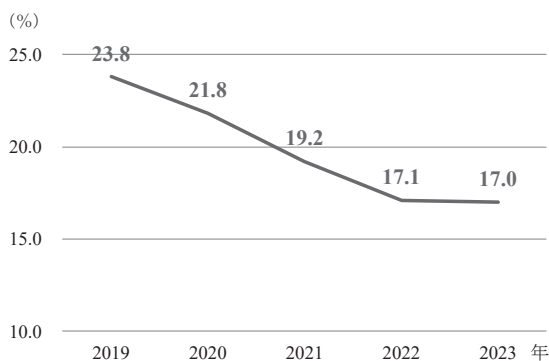


図 1 日本のパスポート保有率 (出典：JATA)

表1 「2023年こそ海外旅行に行きたと思うか」Z世代の意識調査

	行きたいし、行こうと思っている (すでに行った)	行きたいが社会情勢が 不安で行けない	行きたいと思わない
全体	19.7%	23.0%	57.3%
旅行経験者	55.8%	35.1%	9.1%

(出典：観光庁「ツアーセーフティネット」)

本学部は、中期計画の具体的施策として英語能力の底上げと全学生が一度は海外を訪れる機会を設定することを目指している。これまでも海外研修、短期留学、長期留学の3つの留学形態で海外を訪れる機会の提供とサポートを行なっているが、グローバルな舞台で活躍できる人材の育成に向けて全学生の海外訪問を推進するためには、これまで以上に学生を海外に誘引する機会を増やす必要がある。そこで、本研究では、新たな海外研修プログラムの可能性を探索する。

## 1.2 研究目的

本研究では、本学部における海外留学・研修への全学生の参加の実現に向け、教員の研究・教育フィールドを活用した新たな海外研修の可能性を探索するプログラムを作成し、実施・運営する。研修プログラムの効果を測定し、研修プログラム内容と共に研修効果を可視化することを目的とする。

## 1.3 研究の方法

パイロットケースとして、2名の専任教員の研究・教育フィールドを活用した海外研修プログラムを作成する。本研究では、台湾を行き先として選び、台湾のさまざまな都市を周遊する。台湾の歴史、文化、交通、観光について現地を訪れ理解を深める、さらに現地企業を訪問する。教員のゼミナールに所属する学生を中心に有志の協力を得て、プロトタイプングとして研修プログラムを実施する。

研修プログラムは、2つのツールを使用して効果を測定する。ひとつは、産官学連携コンソーシアム「旅と学びの協議会」<sup>2</sup>が提示する旅を通じた学びを科学的に検証するツール（旅と学びの汎用検証ツール）を用いて、ジェネリックスキルに対する効果を測定する。

もうひとつのツールは、国連サミットで採択された「Sustainable Development Goals (SDGs) の目標達成するための人材の内面的成長目標（Inner Development Goals）」の指標を用いて、旅前と旅後の変化を測定する。

## 1.4 研究レポートの構成

本研究レポートの構成を示す。第2章では海外研修の実態、意義と効果を示す。第3章では台湾研修プログラムの概要、第4章では台湾研修プログラムの実施と運営を示す。第5章では効果測定の方法を示し、第6章では、効果測定の結果を示す。第7章では、効果測定結果の考察を述べ、第8章でまとめ、第9章で研修プログラムの課題と今後の展望を示す。

## 2. 海外研修の実態、意義と効果

### 2.1 既存の海外派遣プログラムの実態

本学部には、2023年時点で28校の海外提携校があり、海外研修、短期留学、長期留学の3つのタイプの海外派遣プログラムを提供している。海外研修と短期留学は、夏休みと春休みを利用して行われ、海外研修は教員が引率し約1週間の日程で海外を訪問する。短期留学は、約1ヶ月間学生が海外に滞在し、提携校で学ぶ。長期留学は、3ヶ月から6ヶ月間、提携校で学ぶ。2023年度は、海外研修20名、短期留学26名、長期留学14名の合計60名の学生がこれらのプログラムで海外に渡航した。

### 2.2 海外研修の意義

第4期教育振興基本計画は、将来の予測が困難なVUCAの時代の中で、グローバル化やデジタルトランスフォーメーションは労働市場に変容をもたらしており、これからの時代の働き手に必要となる能力は、新しいものを創り出す創造力や他者と協働しチームで問題を解決する能力が今後一層求められることが予測されると言及している。海外研修の効果は、言語の習得、異文化への適応、ジェネリックスキルの向上など多岐にわたる要素を含むが、本研究では、ジェネリックスキルの向上に着目する。

ジェネリックスキルとは、特定の分野を超えて、あらゆる仕事で必要になる力であり、さまざまな領域に応用できる力である (Freudenberg, Brimble, & Cameron, 2011)。2002年、オーストラリア商工会議所 (ACCI) とオーストラリアビジネス協会は、将来の雇用に役立つスキルとして、コミュニケーション、チームワーク、問題解決力、自発性・積極性、計画性・組織性、自己管理、学習、テクノロジーの8つのスキルを挙げている (ACCI & BCA, 2002)<sup>3</sup>。ジェネリックスキルは、知識、能動的な認知、感情、愛情、感覚運動能力という5つの要素で構成されており (Lamri & Lubart, 2023)、問題解決力、他者と協働する力、コミュニケーション力、学び続ける力、自尊心など、就職、および社会で活躍するために必要とされる能力である (Ahmad, 2012)。

ジェネリックスキルの育成に潜在的な影響力を持つ源のひとつは、旅行や休暇中に得た経験にある (Seidman & Brown, 2006)。19世紀のアメリカの著名な指導者3人の旅行体験

を具体的に分析した結果から、旅行は自信、視点、スキル、目的意識の発達に寄与することが明らかになった (Hunt, 2000)。大学生が海外旅行から帰国したとき、自信、適応力、対処能力、サバイバル能力、不測の事態への対処能力が向上している (Gmelch, 1997)。Pearce & Foster (2007) は、バックパッカーは、旅行体験を通じてジェネリックスキル全般が強化されると述べている。Scarinci & Pearce (2012) は、ジェネリックスキルの習得には、旅行経験が役立ち、特に海外旅行を 4 回以上経験した学生において顕著に効果が認められることを示している。

これまでの研究から、旅行、特に海外旅行は、ジェネリックスキルを高めることが明らかになっている。したがって、海外研修で海外経験を積むことは、学生のジェネリックスキル向上への貢献が期待できる。

## 2.3 海外研修の効果の可視化

Hadis (2005) は、海外留学のインパクトについて、国際問題への関心、語学力、異文化の理解や海外旅行への意欲などについて留学後にアンケートを実施し、その時点の回答と留学前を回顧した回答を収集し、その結果を比較することで効果の測定が可能であることを示している。異文化間のコミュニケーション能力 (Heinzmann, Künzle, Schallhart, & Müller, 2015)、文化的差異に対する志向性 (Hammer, Bennett, & Wiseman, 2003) や自己効力感 (Petersdotter, Niehoff, & Freund, 2017) の視点から海外研修・留学前と後にアンケートを実施し、その結果を分析することで効果を明らかにした研究もある。さらに、鯨島 & 松本 (2022) は、グループ旅行におけるジェネリックスキルの変化を旅行後に調査をすることで人的交流が参加者のジェネリックスキルに与える影響を導出し、プログラム自体の効果測定を行なっている。

近年は、旅を通じた学びの効果を検証するツールや SDGs を実現するために必要な能力、スキルのフレームワークが整理され、旅の成長を測定する指標が示されている。以下、第 2.3.1 項、第 2.3.2 項で詳細を説明する。

### 2.3.1 旅と学びの汎用ツール

旅と学びの汎用検証ツールは、2020 年に設立された産官学連携コンソーシアム「旅と学びの協議会」が提示している旅の効果の検証ツールである。旅を通じた学びと幸せを定量的に把握することへのハードルを下げ、さまざまな旅の効用を科学的に検証することへのチャレンジを可能にすることを目的に作成された。

旅と学びの汎用検証ツールは、鯨島ら (2022) がプログラムの効果検証に用いた、旅後にジェネリックスキルに関する成長や改善について問うための質問票が基になっている。旅前、旅の直後、旅のしばらく後に実施する質問項目が整理されており、旅の参加者自身が、それぞれの時期に設定された質問に回答することで、旅前、旅中、旅後の参加者の自己評

価を収集することが可能である。

質問票は、Q1 基本情報、Q2 日常生活、Q3 行動や考え方、Q4 自分自身のこと、Q5 今回の旅の振り返り 1（日常との比較観点）、Q6 今回の旅の振り返り 2（成長の観点）で構成されている。旅前に、Q1-4 を実施する。旅の直後に Q5-6、旅のしばらく後に Q3-4 を実施する。

### 2.3.2 Inner Development Goals (IDGs) 指標

IDGs とは、SDGs を実現するために必要な人々の内面的能力や価値観に焦点をあてた開発目標である。スウェーデンのヨーテボリ大学のトーマス・ジョーダン氏が主導し、さまざまな機関、組織、個人が参加して行われた 1000 人以上の調査から、23 のスキルが特定され、以下に述べる 5 つのカテゴリーに分類された (Rodriguez, 2023)。

- ① 自分のあり方 (Being)
- ② 考える (Thinking)
- ③ つながりを意識する (Relating)
- ④ 協働する (Collaborating)
- ⑤ 行動する (Acting)

Shtaltovna, Rodriguez, Lindencrona, & Donald (2024) は、IDGs の②考える (Thinking) に含まれる批判的思考・複雑性への認知が、いかに持続可能なキャリアと発展を促すかを示している。Wamsler, Osberg, Janss, & Stephan (2024) は、IDGs を用いて、グローバル・リーダーシップ・プログラムを検証し、IDGs の人間的な側面に取り組むことが持続可能なリーダーシップと教育の推進力となり得ることを示している。

## 3. 台湾研修プログラムの概要

今回の台湾研修プログラムは、2024 年 9 月 1 日より 7 日までの 7 日間で実施した。9 月 1 日に台湾へ入国し、台北で 1 泊ののち、台湾島を反時計回りで一周する形で台南市内にて 2 泊、台東市内で 2 泊、そして台北に戻り 1 泊し、帰国するものであった。

参加学生は 9 名（内 1 名は交換留学生として台湾国内の大学へ残留）、参加者全員が台湾への渡航は初めてであり、そのうち約半数は海外渡航経験が無い学生であった。

一般的な海外研修プログラムとは異なり、団体バスなどは使用せず、あくまでも参加者自らが自分たちの力で移動することを目的とした。これは自分の力のみでも異国の地で生活できることを自覚させることを目指したものである。

また、今回のプログラムは一般的な観光地を巡ることではなく、いわゆる「(多くの日本からの観光客は) 行かない・知らない」台湾を知ることがテーマに、同時により深く台湾の実態を知りながら旅をすることを目的とした。



### 3.1 台湾の特性と研修先としての適性

第1.1節で触れたように、台湾を研修先とする適性は多々考えられる。その適性の一つは、台湾は日本からすれば「身近で渡航しやすい外国でありながら、意外とその内情は知られてない」ことがその大きな理由である。日本から渡航しやすい国といえば、例えば韓国も挙げられるが、韓国以上に台湾の状況は我々日本人の多くは知らないことが多い。それは政治・経済的側面から、歴史や文化的側面、そして民族性やその言語、さらには食事に至るまで多岐にわたる。例えば、多くの学生は中国との政治的問題は「何となく」は認知しているが、実際にはどのような状況であるか、そして台湾国民（とくに若者は）はどのように考えているのか、また台湾企業がどのような成長をしているのか（近年の台湾 TSMC の熊本における半導体工場の開設程度の知識はある程度だろう）、さらには中華系だけでない民族が多く居住しており、それぞれ異なる文化を有していることなど、我々日本人が隣の国でありながらほとんど知ることが出来ていない。このような様々な分野の多くの事象を、研修を通して少しでも知る機会となる。まさしく台湾は多くの事象を知ることが出来る素晴らしいフィールドである。

### 3.2 研修プログラムの設計目的

本研修プログラムを設計するに、その目的は第2.2節にあるように、言うまでもなく参加学生に本プログラムを通してジェネリックスキルを得る体験をしてもらいたいことにある。第1.1節に示したようにパスポート所有率の低さが示しているように、多くの大学生は海外渡航経験がない。渡航経験があったとしても例えば高校時代の修学旅行のみであったり、家族に頼りきりの旅行であったりして、海外渡航経験がジェネリックスキルを得る機会となっていないのが現状であろう。つまり研修を通してジェネリックスキルを得るような研修内容を実施することで、自身の自信、適応力、対処能力、サバイバル能力、不測の事態への対処など問題解決能力を習得してもらいたいと考えている。

### 3.3 研修プログラムの構成要素

第3.2節で触れたように、ジェネリックスキルを得るための要素を本研修に多く取り込むことを考えた。例えば、自ら旅程を理解し航空券等を購入させる、市内での移動方法を自ら調べ行動させるなど、自分の旅程管理をさせる。また、昼食や夕食などを自ら選択させ自ら注文し食事を取るなどを予定の中に意図的に組み込んでいる。ただし、ホテルの予約、チェックイン時の対応、台湾新幹線の乗車券の購入など、参加者全体が共に行動するような事象に関しては、教員側で一括して行った。

## 4. 台湾研修プログラムの実施と運営

### 4.1 プログラム実施のスケジュールと内容

前述のように、プログラムは2024年9月1日より7日（ともに東京発着）まで実施した。プログラムの詳細は付録にて示すが、各日の模様を以下で示していく。

#### 【2024年9月1日（日）：東京ー台北】

この日は東京から台北への移動が中心となった。翌日に遅れて参加する1名の学生以外すべての参加者が羽田空港より台北松山空港へ移動した。基準となるエバー航空の時間に併せて航空券を購入するように事前指導したために、チャイナエアライン（中華航空）、エバー航空、ANA（教員）と利用する航空会社は様々であったが、それでもホテルのチェックイン時間である午後3時にはホテルに集合した。到着後は小籠包を食べに出かけながら、閉館間近の中正紀念堂などを見学した（写真1）。

#### 【9月2日（月）：台北市内企業等訪問、台南移動】

この日は夕刻まで台湾の基礎知識理解と日系企業見学を行い、台湾高速鉄道にて台南への移動を行った。

まずMRT南京復興駅近くの日本台湾交流協会にて早川友久氏の講義を受けた（写真2）。早川友久氏は台湾前総統李登輝氏の日本人秘書であった方で、前半は台湾の基本的な情報を、後半は李登輝氏の秘書になられた経緯を講義形式でお伺いした。その後、企業訪問として丸紅（台湾丸紅股份有限公司）とANA台湾支店（日商全日本空輸股份有限公司台湾分公司）へ訪問させて頂き、両社の関係者より台湾におけるそれぞれの運営内容を聞き、台湾における日本企業を知る機会を得た。その後、台湾高速鐵路（台湾新幹線）にて台南へ移動したが、丸紅において高速鉄道建設の講義を受けた後であったので、実際に単なる移動ではない経験をしたと思われる。この日より台南市内に2泊した。



写真1 中正紀念堂からの夕景



写真2 早川友久氏による講義



### 【9月3日（火）：台南】

午前中は台南市郊外にある玉井區へ行き、マンゴー農家、市場を訪問し、マンゴー生産の本場の状況を知り、午後は本学姉妹校である長榮大學へ訪問、その後台南市内の観光施設を自由行動として訪問した。

朝6時台の鉄道とバスにて台南市の山奥に位置する玉井まで1時間半の道のり、学生らは眠気と戦っていた。玉井に到着後はマンゴー農家を訪問し（残念ながらマンゴーの収穫は前月にほぼ終了していたが）、農家の方が丁寧にマンゴー生産を説明してくださった。その後、マンゴー市場を訪問し、少量ながらもマンゴーの取引を見ながら、学生らはドライフルーツなど土産を購入、その後市場近くのマンゴーアイスクリーム屋にてマンゴーを堪能した（写真3）。

午後は台南へ戻り、改めて鉄道にて本学の姉妹校である長榮大學へ訪問した（写真4）。先方の長榮大學には直前のお願いにも関わらず手厚い歓迎を受け、国際処が中心となり華語文教育中心や応用日本語学科の施設などを案内してくださった。長榮大學訪問後は、各自自由行動とし、学生らは赤嵌楼、大天后宮、林百貨店などの台南駅周辺の観光施設を訪問しながら、夕刻からは夜市を楽しんでいた。ちなみに台南は長い歴史のある街であること以外にも、毎日市内の様々な場所で夜市が開催されることで有名な都市であり、さらには様々な有名な食べ物がある美食の街でもある。



写真3 玉井市場のマンゴー



写真4 長榮大學にて集合写真

### 【9月4日（水）：台南—台東】

この日は台南から台東への移動が中心となったが、観光列車による移動が中心となった。

早朝に台南駅より枋寮駅（台湾屏東県）へ移動。枋寮駅から海沿いを走るレトロ観光列車「藍皮解憂号（Breezy Blue）」に乗車した。



写真 5 藍皮解憂号（正面）



写真 6 藍皮解憂号（客車）



写真 7 太平洋を望む

2020 年末まで普快車という台湾鉄路で最も古い客車（その中には 50 年以上前に製造された日本製車両も含む）にて運行されていたが、電化による廃止の代替として観光列車として再出発をした。枋寮駅より 1 日の乗降客数が 1-2 名といわれる「秘境駅」にも長時間停車をし、乗客は普段と異なる景色を楽しみ、また少数民族の住む地域の最寄り駅にも長時間停車をし、スタッフから原住民に関して説明を受けることが出来た（乗車日は雨天のため簡単に実施されたのみだった）（写真 5-7 参照）。

### 【9 月 5 日（木）：台東】

この日は台東エリアで終日過ごす予定で、午前中に原住民ブヌン（布農）族の村にある布農部落休閒農場を訪問予定であったが、9 月からのバス時刻の変更により訪問することが叶わず、午後に訪問予定であった池上エリアを訪問することとした。

台東市街地（写真 8）から台東駅はバスで 25 分程度と離れた場所にあり、市街地にある台東バスステーションからバスにて池上に向かった。池上郷は台東県の最北部に位置するかなり辺鄙な場所であるものの、池上といえば台湾人にとっては最高品質と評される「池上米」の産地として有名な場所でもある。

まずは池上米を味わうべく池上飯包文化故事館を訪問した。池上米を味わうことが出来るのだが、その方法は「駅弁」（写真 9）。台湾では 10 年ほど前から台鐵弁当が人気を博しているが、池上駅でもこの池上米をつかった「池上弁当」が駅のプラットフォームで売られており、短い停車時間の合間に多くの乗客が弁当を購入していた。現在は駅のプラットフォームでの販売が無くなり、駅周辺での店舗での販売になっているが、そのためこの池上飯包文化故事館は池上弁当を知る施設のような形になっている。施設内では古い台湾鉄路の車両が置かれ、その中で池上弁当を食べることも出来るようになっている。2024 年 5 月に台湾東部で発生した地震の影響があるとはいえ、多くの観光客が観光バスにて訪れ賑わっていた。その後は、学生らは自転車などを利用し、池上米の田園風景を楽しみながら、途中雨に濡らされながらもサイクリングを楽しんでいた。この田園風景は台湾のコーヒーチェーンの CM に使われたり、金城武氏の映画にも使われたりしており、台湾の方々にとっては

非常に有名な場所でもある（写真 10）。



写真 8 旧台東駅（台東市街）



写真 9 池上弁当



写真 10 池上の田園風景

夕刻には台東市街に戻り自由時間としたが、台東で有名な米粉麺の店「榕樹下米苔目」へ行った学生らは、優しい味（カツオ出汁の麺）であったことに驚いていた。一部の学生は「中華系というよりは原住民の料理か沖縄そばのような出汁なのか」とも言っていたのは印象的であった。ちなみにこの頃になると学生らは自ら自由行動を選択する時間が多くなってきており、教員側も敢えて自由行動の時間を多く与えた。

#### 【9月7日（金）・8日（土）：台東—台北—東京】

この日は朝9時台の台東駅からの特急列車（自強號）にて4時間半かけて台北まで戻る予定。1日に宿泊したホテルに改めて戻ることになる。午後3時ごろにホテルのチェックインに併せてホテルに戻り、その後自由行動としたが、一部の学生らは九份や十分を自力で訪問したり、夜の食事なども何も言わずに自分たちで取っていたのは非常に印象的であった。

翌日8日は午後の便にて帰国のため、9時前にチェックアウトしその後は自由時間とした。教員らを含めたグループは故宮博物院に出かけたり、西門町で買い物するグループもいたり、台北動物園に出かけたりするグループもあり、台湾最後の時間を自由に過ごしていた。

#### 4.2 参加者の選定と事前準備

本研修プログラムは2024年5月に本格的に始動をし、教員側にて旅程を作成した。同時にゼミナール内にて本プログラムの募集開始をした。実際には9名の学生が応募した。応募学生には航空券の手配を自ら行うように指導をし（必要に応じて教員側で補助を行い）、予約状況は教員側で管理し、参加学生全員がどの航空会社を利用して渡台するかを把握できるようにした。また、滞在するホテル、台湾高速鉄道（台湾新幹線）、台湾鉄道（台鐵）の特急券（自強號等）、観光列車の予約は教員側で一括にて予約管理を行った。

訪問地に関して、企業訪問（台湾市内）、大學訪問（長榮大學）、マンガー農家は、事前

に教員側にてアポイントメントを取り訪問がスムーズに進むように事前準備を行った。一方で地下鉄（MRT）、バス、台湾鉄路の普通列車（区間車）などの利用は、学生にICカードであるイージーカード（悠遊卡）を持たせることで各自の責任で管理・運用させた。

#### 4.3 運営体制とサポート体制

運営体制としては、同一にての移動（鉄道など）、滞在（ホテル）に関しては教員側にて一括管理を行った。それ以外は移動の時間などの予定表に詳細に記載した以外は、学生自らが確認して行動できるようにさせた。同時に、基本的に滞在中は教員側が学生の行動が可視化できるように、LINEなどのSNSを通してコミュニケーションが取れるようにした。

#### 4.4 プログラム実施中の主要な活動と経験

主要な活動として、台北での早川氏よりの講義、企業訪問、台南での滞在（長榮大學訪問）、観光列車乗車と台東での滞在の3項目に触れていきたい。

まず、2日目の台北にて、早川氏より台湾における一般的知識の講義を受けた。参加者の殆どが台湾への初訪問であること、台湾についての知識も深くはない彼らにとり、台湾に入国し導入的な講義は非常によいタイミングであった。また早川氏がどのようにして李登輝氏の秘書になられた経緯などは就職活動を控えている学生らにとっては刺激的であったようだ。午後の企業訪問においても、海外で働くということがどのようなことであるか、その一部を知り得たようであった。特に、丸紅にて台湾高速鉄道建設に関わる話を受けたすぐ後に実際に台南への移動に高速鉄道を利用したことで、学生には講義の内容を直に感じることが出来たといえる。

台南市内では、特に本学の姉妹提携大学である長榮大學を訪問させて頂いた。キャンパス内に台湾鉄路の駅を有するくらい大きな大学の施設には驚いていたようであるが、教員側としては海外の大学を見て感じてもらいたいという思いがあり、その思惑はまんまと嵌ったと感じた。長榮大學は本学との間で交換留学生の相互受け入れを実施している以外にも、毎年、春夏に「中国語・台湾文化研修」、夏季に「石垣島スタディーツアー」を実施しており、参加学生らが次へ続くような訪問になってくれればとも考えている。

4日目には、台東に向けて、観光列車「藍皮解憂号」での3時間程度の旅であったが、学生たちは非冷房で窓全開の車中で、中央山脈を越えていった先の太平洋の感動的な景色には心打たれていたようであった。台東駅から市内へ移動し自由時間としたが、普段体験することのない車内の揺れに疲れたようで、散策に出かける学生はまばらであった（台湾滞在4日目ということで疲れも出てきた参加学生もいた様子）。その翌日には、池上へ向かったが、日本においても米どころの広大な田園風景を間近で見ること無き上に、田園風景を楽しみながら、途中雨に濡らされながらもサイクリングを楽しんでいた。このような通常では体験出来ないことを体験出来たことが、参加学生らにとってはかなり刺激的であっ



たようである。

最後に台北に戻ってきたが、ホテルにチェックイン後は、学生自らが進んで自由行動していったことはとても印象的であった。それこそジェネリックスキルが少しでも持ち始めてきていることが認識させられた。

#### 4.5 現地での課題とその対処法

今回のプログラムにおいていくつかの課題が生じた。ここでは大きく3点を挙げる。

まずは、今回は7日間で台湾島を一周するということで、移動時間が多くなることが出発前からも危惧された。今回の目的はジェネリックスキルの会得ということもあり、敢えてこのような旅程としたわけであるが、返ってこれが功を奏したと言えなくもない。ただし、台南での滞在時間が少々少なく、参加学生は十分に台南市内を散策することが出来なかったということも反省点である。移動の多さに関しては今後のプログラム作成時には気を付けていきたいところである。

続いて、観光列車「藍皮解憂号」での窓全開の車中が、参加学生には蒸し暑い非冷房という車内の環境、また古い列車の振動が想像以上にダメージであったようである。普段利用している電車との違いをしっかりと認識していく必要は運営側もあると感じている。

さらに、台東市内において、インターネット上の時刻表が変更されておらず、予定の旅程が実施できなかったことである。9月の初旬という季節が変わるところで、特に地方での公共交通機関の時刻の変更は、運営側には事前に改めて確認しておく必要はあることを改めて認識した。

### 5. 効果測定の方法

本研究では、グローバル人材に必要なジェネリックスキルに着目したプログラムの効果検証に取り組む。使用するツールは、将来的に大学が提供するさまざまな海外研修や海外留学プログラムの共通効果測定ツールとする可能性を模索するために、汎用性を意識して選択する。さらに、研修プログラムの効果測定ツールが、参加者への教育効果を上げることを目指し、参加者の内省や自己変容への気づきに繋がることを視野にいれて選択する。

その結果、第2.3.1項の旅と学びの汎用ツールと第2.3.2項のIDGs指標（IDGsツールキットを基に日本語で作成したもの）の2つのツールを用いてプログラムの効果を測定する。台湾研修プログラムに参加する学生に対し、旅と学びの汎用ツールは、海外研修実施前、終了直後、終了しばらく後の3つの時期に設定された質問を実施する。IDGs指標は、海外研修実施前と終了後に同じ内容を質問する。以下で手順を説明する。

## 5.1 手順1：海外研修実施前にアンケートを実施

台湾研修プログラムに参加する学生に対して、以下（1）と（2）のアンケートを実施する。

### （1）旅と学びの汎用ツール

時期：海外研修出発前～台湾到着

方法：Google フォームの質問表への回答

内容：

- ① 基本情報、旅の経験について、選択肢から年齢層、経験数を選ぶ。
- ② 日々の生活の移動距離、新しい経験、不便を感じることにについて、選択肢から移動距離、経験数を選び、経験については具体例を記述する。
- ③ 日常の行動や考え方について調査する。表2の項目について各3問のジェネリックスキルが発揮されている行動や考え方を示す質問に対し、自己評価を行い、1 全く当てはまらない、2 あまり当てはまらない、3 どちらかという当てはまる、4 かなり当てはまる、5 非常に良く当てはまる から回答する。

表2 日常の行動・考え方質問項目

カテゴリー	項目
他者との関わり	共感
	コミュニケーション
	チームワーク
グローバル性	エンパワーメント
	多様性理解
	柔軟性
イノベーション力	グローバルな人間関係
	積極的な他言語活用
	問題発見
美徳	変革力
	挑戦意欲
	独創性
自己	熱意
	博愛
	感謝心
	謙虚さ
	自分らしさの発揮
	自己管理
	何事も学ぼうとする姿勢
	主体性

（旅と学びの汎用ツールを基に筆者作成）

### （2）IDGs 指標

時期：海外研修出発前の空港～台湾到着

方法：質問が記載された用紙（移動中の機内での実施を想定）への記入。

内容：表3で示したIDGs指標の質問項目について、回答を選択肢から選択する。



表3 IDGs 指標質問項目

カテゴリー	項目
自分の在り方 -自己との関係性	自分にとっての重要な価値観がある 価値観に沿った行動をとる オープンさと学ぼうとする意欲・姿勢 自分を理解する力 今ここにあること
考える -認知スキル	思考の偏りに気づく 複雑さの認識 対照的な視点・見通す力 意味を見出す力 長期思考とビジョニング
つながりを意識する -他者や世界を思いやる	感謝 つながっているという感覚 謙虚さ 共感と思いやり
協働する -社会的スキル	コミュニケーション・スキル 共創スキル 多様性の歓迎、異文化を受容し生かすの能力 信頼関係構築・維持能力 集団を動かすスキル
行動する -変化を推進する	勇気 創造性 楽観性 粘り強さ

## 5.2 手順2：海外研修終了直後にアンケートを実施

台湾研修プログラムに参加した学生に対して、以下（1）と（2）のアンケートを実施する。質問表は、学生の実施忘れを防止するために、同一のフォーマットにまとめて1種類のアンケートフォームで実施する。

時期：海外研修帰国翌日から1週間内

方法：Google フォームの質問表への回答

内容：以下（1）と（2）に示す。

### （1）旅と学びの汎用ツール

- ① 研修での新しい経験、不便を感じたこと、印象に残ったことについて、選択肢から移動距離、経験数を選び、経験については具体例を記述する。
- ② 研修中の行動や考え方について調査する。表2に示した20項目について各1問ずつ、ジェネリックスキルが発揮されている行動や考え方を示す質問に対し、1 全く当てはまらない、2 あまり当てはまらない、3 どちらかという当てはまる、4 かなり当てはまる、5 非常に良く当てはまる の5段階で回答する。
- ③ 研修プログラムの終了後、次の旅の行き先、自分の成長や意識の変化、今後取り組みたいことについて自由記入で回答する。

## (2) IDGs 指標

表 3 の項目について、第 5.1 節 (2) と同じ質問と選択肢から該当するものを選ぶ。

### 5.3 手順 3 : IDGs 指標の前後比較の提示

IDGs 指標の質問項目には、発揮度が高い、中程度の発揮、発揮度が低い状態を示す選択肢があり、自分に合致するものを選ぶ。発揮度が高い選択肢は評点 5、中程度の発揮は 3、発揮度が低い選択肢の評点を 1 として、海外研修前と後の IDGs 指標の比較を可視化する。

海外研修プログラムに参加した学生に対して、各々の IDGs 指標の海外研修実施前と海外研修終了直後の回答比較を提示する。

### 5.4 手順 4 : 海外研修終了からしばらく後にアンケートを実施

台湾研修プログラムに参加した学生に対して、以下 (1) と (2) のアンケートを実施する。質問表は、学生の実施忘れを防止するために、同一のフォーマットにまとめて 1 種類のアンケートで実施する。

#### (1) 旅と学びの汎用ツール

時期：海外研修帰国 4 週間後

方法：Google フォームの質問表への回答

内容：日常の行動や考え方について、第 5.1 節 手順 1 で示した表 2 日常の行動・考え方質問項目について、海外研修実施前に行ったアンケートと同一の質問と選択肢を用いて調査を実施する。

#### (2) IDGs 指標

第 5.3 節 手順 3 で返却された自身の IDGs 指標の海外研修実施前と海外研修終了直後の自己評価比較を確認するよう指示し、以下について自由記入として調査する。

- ① 研修前に自己評価を行ったことで、研修中意識ができて良かったこと、意識したことで旅が楽しめなかったこと
- ② 研修前後の自己評価比較を見て、自分の中で改善した、成長したと感じるところ
- ③ IDGs 指標の項目の中でスキルを伸ばしてみたい項目

### 5.5 手順 5 : 調査結果の分析

#### (1) 旅と学びの汎用ツールを用いて収集したアンケート結果

- ① 研修直後に実施したアンケートの「研修での新しい経験、不便を感じたこと、印象に残ったこと」に関する 1 日の経験回数をとりまとめる。
- ② 「行動や考え方」について、参加者ごとに海外研修実施前、終了直後、終了から

しばらく後の回答を比較し、その変化を確認する。

- ・ 選択肢：1 全く当てはまらない、2 あまり当てはまらない、3 どちらかという当てはまる、4 かなり当てはまる、5 非常に良く当てはまる の先頭にある数字は、ジェネリックスキルの高さを示しているため、その質問項目の評点として扱い集計する。
- ・ 研修実施前と研修終了しばらく後に実施するアンケートは、表 2 で示された 5 つのカテゴリの 20 項目に対し、各 3 問の質問がある。研修終了直後に実施するアンケートでは、表 2 の 20 項目に 各 1 問の質問で、研修中の行動や考え方を調査している。そのため、研修実施前と研修終了しばらく後のアンケートの回答は、各項目につき、3 問ある質問の平均値を算出し、当該項目の値として研修中の回答と比較する。
- ③ 自由記入のコメント内容から参加者が研修プログラムを通じて得た学びや意識の変化について考察する。

## (2) IDGs 指標を用いて収集したアンケート結果

第 5.4 節 手順 4 (2) で示した①～③に関する自由記入コメントから、参加者が自覚した成長を考察する。

## 6. 効果測定の結果

本研修プログラムは、参加学生が 9 名（内 1 名は 2 日間の参加のみ）であった。参加者から提出された旅と学びの汎用ツール と IDGs 指標 のアンケートへの回答を用いて効果を測定し、その結果の可視化を検討する。

### 6.1 旅と学びの汎用ツールを用いた効果測定の結果

3 つの時期に分けて実施したアンケートへの回答数は、研修実施前 6 件、研修終了直後 7 件、研修終了しばらく後は 5 件であった。研修実施前と研修終了直後のアンケート両方に回答を得られた件数は 5 件、うち、全てのアンケートに回答を得られたのは 3 件であった。収集されたアンケートへの回答を用いて効果を測定した結果を以下に述べる。

#### (1) 研修での新しい経験、不便を感じたこと、印象に残ったこと

研修終了直後に実施したアンケートへの回答 7 件から、研修中の経験について、「一日に何回くらい経験したか」の回答数を表 4 に示す。新しい経験に該当する「今までに行ったことのないところに初めていった経験」、「今まで見たことのないようなものを初めて見た経験」には、ほぼ全員が 1 日に 6 回以上と回答している。

表4 「研修中、一日に経験した回数」の回答数

	今まで行ったことのないところに初めて行った経験	今まで見たことのないようなものを初めて見た経験	今まで話したことがない人と初めて話した経験	今までやったことがないようなことを初めてやってみた経験	今まで知らなかったことを初めて知ったような経験	感動したなあと思うような経験	怖いなあ・不安だなあと感じた経験	思い通りにいかないなあと思うような経験	物理的に手間がかかるなあと思った経験	心理的に大変だなあと思った経験
0回	0	0	0	0	0	0	0	0	4	2
1-2回	0	0	1	1	2	2	6	6	2	4
3-5回/3回以上	0	1	3	3	3	3	1	1	1	1
6回以上	7	6	3	3	2	2	0	0	-	-

## (2) 日常・研修中の行動や考え方

研修実施前のアンケートで旅前（研修前）、研修直後のアンケートで旅中（研修中）、研修終了しばらく後に実施したアンケートで旅後（研修後）における参加者の行動や考え方の自己評価を収集した。第5.1節の手順1、表2で示した5つのカテゴリーの20項目の評点の全項目平均を、回答者別で旅前、旅中、旅後で比較した結果を図2で示す。全3回のアンケートに回答を得た3件は、旅前、旅中と旅後の評点の比較を行った。研修実施前と研修直後アンケートのみの回答を得た2件については、旅前と旅中の評点を比較した。

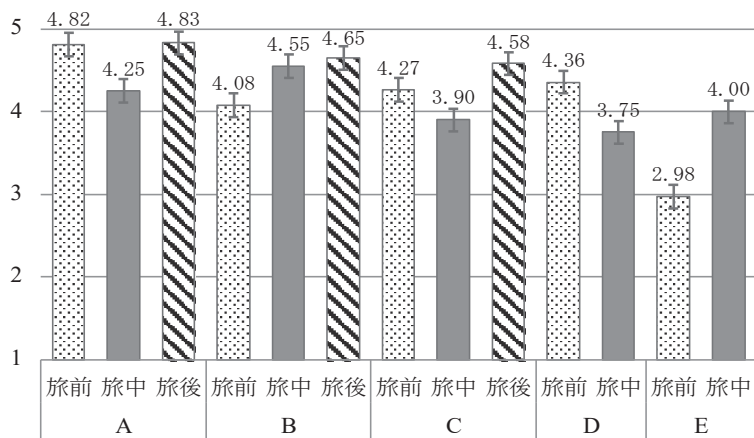


図2 旅前・旅中・旅後の行動と考え方（回答者別23項目平均点）

旅前、旅中、旅後の行動や考え方に関する質問項目20の評点は、項目も上昇・下降についてもさまざまであり、回答者其々異なっていた。図2で示した全20項目の評点平均を用いた回答者ごとの推移について説明する。

3回のアンケートに回答した図2A、B、Cの旅前と旅後の平均点を比較したところ、A、B、Cすべての評点が旅後に上昇していた。旅前と旅中のみの比較を行った図2DとEを加えて、5件の旅前と旅中の全項目の評点平均を比較すると、旅中に上昇しているものは2件であり、3件が旅中に下がっている。旅中の評点が下がっている3件には、旅後の評点が旅前の評

点を上回っている2件が含まれている。

### (3) 自由記入欄まとめ

研修終了直後に行ったアンケートで収集した次の旅への意向、本研修プログラム後の自分の行動や意識の変化、今後取り組みたいことのまとめを記述する。

#### ① 次の旅への意向

研修終了直後のアンケートで調査した「次の旅に対する意向」の結果を、表5で示す。回答者7件中、海外・国内両方行きたいが最も多く4件、次に海外に行きたい2名、1名が国内に行きたいと回答し、旅に出たいと思わないとの回答はなかった。

表5 研修後の次の旅への意向 (n=7)

海外・国内両方に行きたい	4
海外に行きたい	2
国内に行きたい	1
旅に出たいと思わない	0

#### ② 自分の行動や意識の変化、今後取り組みたいこと

「研修プログラムを終えて、自分の意識や行動に変化があれば記入」「今後と考えていること、自分の強みとして伸ばしていきたいところを具体的に記入」の質問に対して、自由記入欄の記載された内容の抜粋を表6で示す。他者との関わりでの記述が多く、その他多様性理解のグローバル性、イノベーション力、自己に関する学びに対する意欲的なコメントが記述されていた。

表6 自分の行動・意識の変化、今後取り組みたいこと (抜粋)

自分の意識や行動の変化	台湾研修に参加すると決めた一歩踏み出す気持ちを大事にしたい
	協調性、仲間と協力して取り組む喜びを感じるようになった
	主体的なコミュニケーション力、自分から話しかける力
	自分に自信が持てた
	協調性を持つことの大切さを感じた
今後、 取り組んでいきたいと 考えていること、 自分の強みとして 伸ばしていきたいこと	各国の歴史について知りたいと思うようになった
	自分が変わりたいと思っている点を再確認できた
	他者とのコミュニケーション力と協調性を高めたい
	会話力、洞察力
	より多くの文化や価値観に触れる経験を積みたい
	同じ目的のために活動できるようにするための努力
	こまめなコミュニケーションと意見交換
	積極性、賢さ
	活かす力、国際力、学識、人間力
	一旦全てを受け入れ、否定的に入らず俯瞰的に物事を捉える力
	各地域の魅力を見つける

## 6.2 IDGs 指標を用いた効果測定の結果

研修実施前（旅前）と研修終了直後（旅後）に実施した IDGs 指標アンケートの両方に回答した件数は、8 件であった。研修終了しばらく後のアンケートへの回答は 3 件であった。収集されたアンケートへの回答を用いて効果を測定した結果を以下に述べる。

### (1) 旅前と旅後の回答結果比較

IDGs 指標 23 の質問項目の評点は、旅前と旅後での変化の有無、上昇・下降、その項目について、回答者によってさまざまに異なっていた。回答者別に旅前・旅後で評点が上昇した数、下降した数、変化なしの数を図 3 で示す。図 3 全ての回答者に上昇した項目が 1 つ以上あり、c を除けば、その他 6 件は、旅前より旅後に評価が上昇した項目数が、下降した数を上回っている。

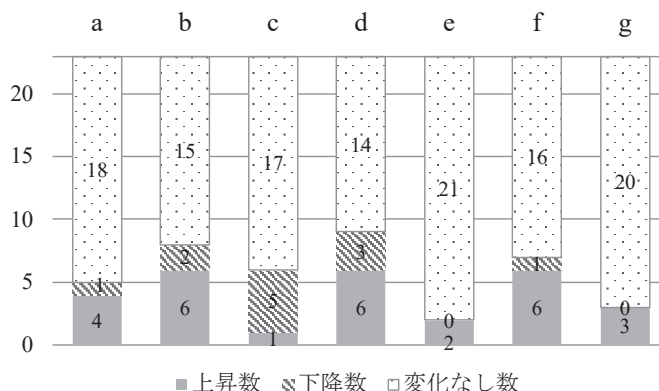


図 3 旅前・旅後 IDGs 指標の変化（回答者別・数）

### (2) 自由記入欄まとめ

研修前に IDGs 指標に関する自己評価をすることで、旅での経験をより具体的な価値として理解できたなど、旅を通じた成長を意識して研修に臨んでいた記述があった。一方、吸収することを重視したため、本来の楽しみを見失ってしまったとの振り返りもあった。

旅前・旅後の自己評価の比較を確認して、自分の中で改善した、成長したと感じるところは、回答のあった 3 件すべてが、協働する - 社会的スキルのコミュニケーションスキル、多様性の歓迎に関する記述をしていた。複数人数で旅をする中で、協働するためのスキルの必要性に遭遇し、これまでの自分とは異なる意識や行動を心がけて、乗り越えたことが読み取れる。今後伸ばしたいスキルに関しては、5 つのカテゴリーから 3 ～ 5 個を上げ、向上心を示す記述があった。



## 7. 効果測定結果の考察

第6章の効果測定の結果について考察を行う。

### 7.1 旅と学びの汎用ツールでの測定結果の考察

ジェネリックスキルに関わる日常の行動や考え方に関する自己評価の全項目平均値の推移から、研修前と比較して研修終了後約1ヶ月後の日常の行動や考え方の数値は、収集された回答3件中3件が上昇した。研修の参加者9名に対して3件のサンプル数は、本研修プログラムの有効性を示すには十分とは言えない。しかしながら、プログラムに参加し、回答を提供した3名の学生には、プラスの結果が導出された点は、ジェネリックスキルの成長に多少なりとも効果があったことを示唆する。

次に、研修前と研修中の行動や考え方に関する評点について考察する。上記3件の研修中の自己評価の全23項目平均値は、研修前と比較して上昇1件、下降2件であった。一方、研修後の平均値は、すべて研修前よりも上昇している（図2）ことから、本研究においては、研修中の評点が研修前から上昇するほど、旅後の評点に良い影響を与えるわけではないことがわかった。図4に本研究で収集した5件の旅前と旅中の行動と考え方に関する全項目平均値推移を示す。回答者ごとに評点の上昇・下降の違いはあるもののA、B、C、D、Eすべてに、0.37から1.03ポイントの変化が出ている。旅前のアンケートは研修出発直前に実施しているため、旅中として評価の対象となった期間から最大でも1週間しか経過しない中で、考え方や行動に変化が現れている。

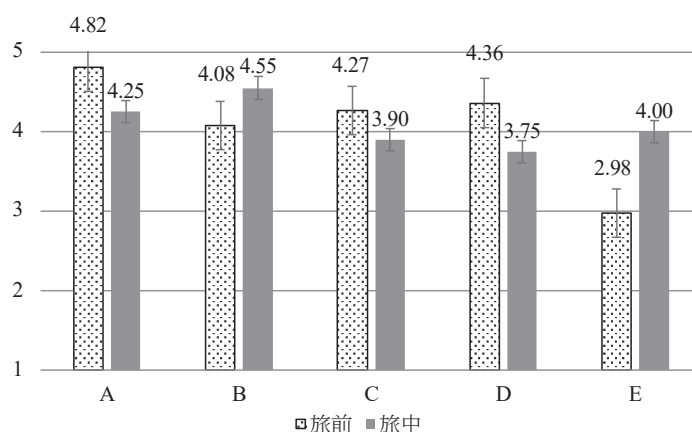


図4 旅前・旅中の行動と考え方（回答者別23項目平均比較）

アメリカを中心に変革的旅行経験に関する研究が行われている。変革的旅行経験とは、旅行をきっかけに既存の価値観や世界観に変化が起こる経験である（Soulard, McGehee, &

Knollenberg, 2021)。混乱を引き起こすジレンマに遭遇すると、旅行者はそれまでの知識が突然役に立たなくなるという事実と直面する (Frost, 2010)。Mezirow (2003) は、旅行者は、自分で解決策を打ち出すことができない困難な状況と直面したとき、自分の世界観を見直そうと迫られると仮定している。図 4 で示した旅中の値の変化が、変革的旅行経験によるものかは確認できていない。しかし、住み慣れた場所を離れて台湾を巡りながら、現地の人々、大学の友人、教員と一週間過ごす経験は、参加した学生に自分の相対化、内省を促した可能性がある。これらは、変革的旅行経験に繋がる一歩であると考ええる。本研修プログラムは、参加者に内省を促し、小さくとも行動や考え方に変化を起こさせたことが示唆された。多くの先行研究が示す「旅によるジェネリックスキルへの効用」の一端が導出できたと考える。

本研究では、旅と学びの汎用ツールを用いて、プログラム効果の可視化を目指したが、プログラム全体を評価するまでには至らず、参加者各々の研修効果の可視化にとどまった。しかしながら、旅での経験と内省による気づき、その後の行動や考え方に変化が起きることは確認できた。これらを可視化し蓄積することは、研修プログラムを作成する際の助けになる。加えて、旅と学びの汎用ツールで収集したデータを分析することで、参加者個々の成長や変化を確認することができた。参加者の成長を促進するためには、旅での経験や気づきを参加者自らが語るワークショップなどを行い、研修を通じた自己の成長を自覚し、行動変容を動機づけする機会を予め設計しておくことの示唆を得た。

## 7.2 IDGs 指標の測定結果の考察

第 6.2 節で述べた通り、研修実施前（旅前）と研修終了直後（旅後）に実施した IDGs 指標 23 項目の自己評価、旅後に変化した項目、数共に一人ひとり異なっていた。

図 5 は、本研究で得られた 8 件サンプルの旅前と旅後の評価に変化があった項目数の平均と標準誤差を示している。研修全体の評価として集計した数値を捉えるには、サンプル数が不十分であった。加えて、旅後に評価が上昇した項目数、あるいは下降した項目数との差異を算出し、研修プログラムの効果測定を試みたが、他研修のデータと比較することができず、プログラム全体の効果を判断するには至らなかった。

しかしながら、参加者が提出した自由記入欄には、自分の成長した点と今後の課題を 23 項目に沿って具体的に記述しているコメントが散見された。IDGs 指標の 5 カテゴリーに分類された 23 項目について自己評価を行うこと、旅前と旅後の比較を確認することで、参加者の自己分析や内面的成長の確認を促した効果だと考える。参加した学生には、研修終了しばらく後に実施するアンケートを提出した時点で本研修プログラムは終了している。参加者は、海外研修プログラムを通じて気づきを得ているため、教育効果を最大化していくためには、旅中での気づきを行動変容に繋げるための事後教育が必要であることの示唆を得た。

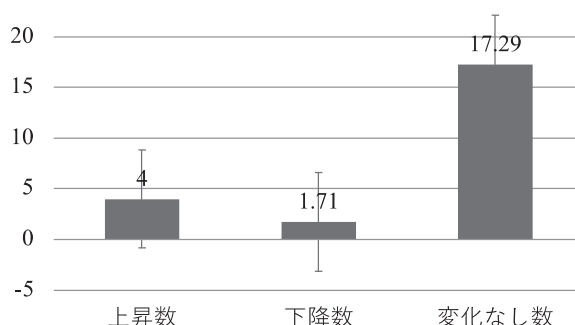


図5 旅前・旅後 IDGs 自己評価の変化項目数

## 8. まとめ

本研究の目的は、VUCA 時代に社会で活躍するグローバル人材の育成に向け、本学部中期計画として目指す全学生が一度は海外を訪れる機会を設定することを目指して、教員の研究・教育フィールドを活用した新たな海外研修の可能性を探索するプログラムを作成し、実施、運営した記録を残すこと、研修プログラムの効果を測定し、効果を可視化することであった。さらに、将来的に海外研修・海外留学の効果を測定する共通ツールの可能性を模索することであった。

本研究で実施した6泊7日の台湾研修プログラムは、ジェネリックスキルを得るための要素を取り入れ、参加者が異国の地でも自力で生活できることを自覚することを目指した。一般的な観光客が訪れない場所に行き、あまり知られていない台湾のこと、台湾の実態を深く知ることを目的に設計された。公共交通機関を利用して台湾を反時計回りに一周する旅は、決して楽なものではなかったが、参加者の学生は、旅程の後半に近づくと学生だけで行動するようになっていった。帰国前に設定した自由時間では、学生だけで遠方の観光地に行く計画をたて、公共交通機関を使って出かけた。その旅先で、想定外の出来事があった際、学生同士で力を合わせて乗り越える、予定通りにならない体験をも学びとして捉えるなど、参加者の行動の変容から、本研修プログラムの手応えを得られた。加えて、運営上の留意点などの課題を抽出することができた。本研究で設計したプログラムについて、設計、準備、実施、運営、今後向けの課題と留意点について、記録として残すことができた。

本研修プログラムの効果測定は、グローバル人材として必要性を増しているジェネリックスキルに対する効果を「旅と学びの汎用ツール」と「IDGs 指標」の2つのツールを用いて測定した。「旅と学びの汎用ツール」では、研修実施前、研修中、研修終了後のジェネリックスキルに関わる行動や考え方の自己評価を調査した。3回の自己評価を全て実施したサンプルは3件にとどまったが、3件すべてが、旅前より旅後の全項目平均が上昇していた。このことから、回答を提出した学生については、ジェネリックスキルの成長に良い影響を

与えたことが示唆された。旅前と旅中の自己評価は、回答によって上昇、下降は異なるが、すべての回答が変化していた。短期間で、行動と考え方に変化がみられたことから、本研修プログラムは、旅中の非日常体験を通じて内省が促し、日常の行動や考え方に変化を導出したと考える。

IDGs 指標を用いた効果測定では、参加者が 5 カテゴリー 23 項目のスキルについて旅前、旅後に自己評価を行った。収集した 7 件の回答のうち、項目に違いはあるが 1 件を除いては、評価が上昇したものの数が下降した数よりも多く、IDGs 指標について個々人の成長が確認された。しかしながら、いずれの効果測定もサンプル数が少なく、他研修のデータと比較した検証も行えなかったため、プログラム全体の効果としての可視化、海外研修、海外留学に共通して使用できるツールの提示には至らなかった。

本研究では、「旅と学びの汎用ツール」「IDGs 指標」の 2 つのツールに対する参加者の自己評価を研修の前後で比較し、参加者個々の変化や成長を確認することができた。このことから、本研究で実施した台湾海外研修プログラムは、参加者のジェネリックスキル、IDGs の内面的能力や価値観の成長に一定程度効果をもたらしたと考える。

## 9. 研修プログラムの課題と今後の展望

本研究で台湾研修プログラムに関する記録を残したことは、今後の海外研修プログラム開発に寄与すると考える。しかしながら、本プログラムは一例に過ぎないため今後も新たな可能性を探索する海外研修設計と実施を継続していきたい。加えて、本研究で明らかになったプログラム運営上の留意点や課題を反映し、台湾研修プログラムの改善にも取り組みたい。

本研究では、2 種類のツールを用いてジェネリックスキルと IDGs 指標の内面的能力および、価値観に焦点をあてて効果を測定したが、プログラム全体の有効性を示すには至らなかった。その理由の一つは、サンプル数が少なかったことにある。当初より参加者は 9 名と多くないサンプル数を想定していたが、さらに未提出があった。アンケートは、3 回に渡って実施され、毎回多くの質問が設定されていた。今後に向けて、回答率を向上するために質問の内容や質問方法、アンケート実施のための時間の確保など、回答する参加者の負担軽減を検討する必要がある。回答率の向上とあわせて、さまざまな研修のデータ蓄積にも取り組み、本学部の海外研修・海外留学の共通指標を整備し、研修効果の可視化、研修間で効果の比較を可能にしていきたい。

アンケートへの協力を得られた参加者の自己評価から、一人ひとりの旅前と旅後の評価を比較することで、各自の変化や成長を確認することができた。効果測定ツールは、ジェネリックスキルや IDGs 指標に求められるカテゴリーや項目が示されているため、参加者の自己評価や成長の自覚に役立つと考える。今後は、効果測定ツールの教育目的での活用

を検討したい。例えば、自己評価の結果を可視化して提示する、研修後にワークショップで振り返りを行い、個々の気づきと学びの自覚、行動変容の動機づけをサポートするなど教育効果を引き上げるためのプログラムを織り込んだ海外研修の企画、検討したい。

本研究では研修を通じて参加者が成長したことは確認できたが、その成長がどのような経験によって、どの能力を変化させたかを収集するには至らなかった。今後は、研修において意識・行動の変化がどのように導出されたのか、ナラティブを用いて収集し、研修中の経験と成長の相関を調査したい。さらには、変革的旅行経験を生む研修プログラムの検討に繋げていきたい。

本研究は、教員のアセットを利用して海外研修を企画した。参加者はゼミナールの学生を中心に、当該教員と日頃からコンタクトのある学生であった。したがって、今後も研修効果を最大化するべく、参加者の成長を見守り、サポートを継続したい。

## 謝辞

本プログラムの実施にあたり、ご講演ならびに訪問を快く受け入れてくださいました日本台湾交流協会 早川友久様、丸紅（台湾丸紅股份有限公司） 董事長兼総経理 相馬伸一郎様、スタッフの皆様、ANA 台湾支店（日商全日本空輸股份有限公司台湾分公司）支店長 古牧海様、林佳勳様に感謝の意を述べさせていただきます。また日本で訪問先をご紹介くだり、私どもの受入れのご調整をくださりました ANA AKINDO 東京支店 支店長代理 島一範様に感謝申し上げます。島様のお力添えがなければ、今回の訪問は実現できませんでした。また、長榮大学には直前のお願いにも関わらず手厚い歓迎を受いただき、国際処が中心となり華語文教育中心や応用日本語学科の施設などを案内してくださいましたことに感謝の意を述べさせていただきます。

最後に、共同研究として大学よりご支援をいただいている本研究を今後も発展できるよう尽力していく所存です。誠にありがとうございました。

本論文の執筆担当は以下の通りである。

第1～2章、5章以降：今村康子

第3～4章：山田大介

## 注

<sup>1</sup> 2023（令和5）年6月16日閣議決定された第4期教育振興基本計画。教育振興基本計画は、教育基本法（平成18年法律第120号）に示された理念の実現と、教育振興に関する施策の総合的・計画的な推進を図るため、同法第17条第1項に基づき日本政府として策定する計画。

<sup>2</sup> ANA ホールディングス株式会社事務局と理事会、参加団体（法人、教育機関、自治体等）、個人研究員で構成されてる。教育工学・幸福学・観光学の視点から旅の効用を科学的に検証し、

旅を次世代教育の一環としての活用を提言することを目的に2020年6月に設立。

- <sup>3</sup> 2002年、オーストラリア商工会議所（ACCI）とオーストラリアビジネス協会（BCA）は、教育・科学・訓練省（DEST）とオーストラリア国家訓練局（ANTA）からの資金援助を受けて、「将来の雇用に役立つスキル」を発表した。

## 参考文献

- Ahmad, S. (2012). Generic Skills from Qur'Anic Perspective. , 1, 43-53. <https://doi.org/10.24035/IJIT.01.2012.006>.
- Freudenberg, B., Brimble, M., & Cameron, C. (2011). WIL and generic skill development: The development of business students' generic skills through work-integrated learning. *Asia-Pacific Journal of cooperative education*, 12(2), 79-93.
- Frost, Warwick. 2010. "Life Changing Experiences: Film and Tourists in the Australian Outback." *Annals of Tourism Research* 37 (3): 707-26.
- Gmelch, G. (1997). Crossing cultures: student travel and personal development. *International Journal of Intercultural Relations*, 21(4), 475-490.
- Hadis, B. F. (2005). Gauging the impact of study abroad: how to overcome the limitations of a single - cell design. *Assessment & Evaluation in Higher Education*, 30(1), 3-19.
- Hammer, M. R., Bennett, M. J., & Wiseman, R. (2003). Measuring intercultural sensitivity: The intercultural development inventory. *International journal of intercultural relations*, 27(4), 421-443.
- Hunt, J. B. (2000). Travel experience in the formation of leadership: John Quincy Adams, Frederick Douglass and Jane Addams. *Journal of Leadership Studies*, 7(1), 92-106.
- Lamri, J., & Lubart, T. (2023). Reconciling Hard Skills and Soft Skills in a Common Framework: The Generic Skills Component Approach. *Journal of Intelligence*, 11. <https://doi.org/10.3390/jintelligence11060107>.
- Mezirow, J. (2003). Transformative learning as discourse. *Journal of transformative education*, 1(1), 58-63.
- Pearce, P. L., & Foster, F. (2007). A "university of travel" : Backpacker learning. *Tourism management*, 28(5), 1285-1298.
- Pedersen, P. J. (2010). Assessing intercultural effectiveness outcomes in a year-long study abroad program. *International Journal of intercultural relations*, 34(1), 70-80.
- Petersdotter, L., Niehoff, E., & Freund, P. (2017). International experience makes a difference: Effects of studying abroad on students' self-efficacy. *Personality and Individual Differences*, 107, 174-178. <https://doi.org/10.1016/J.PAID.2016.11.040>.
- Rodriguez Carreon, V. (2023). Liminality: Change starts within. *Challenges*, 14(2), 25.
- Seidman, A., & Brown, S. C. (2006). Integrating outside learning with the classroom experience: the student learning imperative. *Education*, 127(6), 109-115.
- Shtaltovna, Y., Rodriguez Carreon, V., Lindencrona, F., & Donald, W. E. (2024). Cognitive Skills Within the Inner Development Goals (IDG) Framework: Empowering Sustainable Careers and Sustainable Development. *GILE Journal of Skills Development*, 4(1), 74-94.
- Soulard, J., McGehee, N. G., & Stern, M. (2019). Transformative tourism organizations and globalization. *Annals of Tourism Research*, 76, 91-104.
- Wamsler, C., Osberg, G., Janss, J., & Stephan, L. (2024). Revolutionising sustainability leadership and education: addressing the human dimension to support flourishing, culture and system transformation. *Climatic Change*, 177(1), 4.
- 鯨島 卓, 松本 英明, グループ旅行における人的交流がジェネリックスキルに与える影響, 日本観光研究学会全国大会学術論文集, 2022, 37 巻, 第 37 回 日本観光研究学会全国大会, p. 181-186, 公開日 2023/06/23, Online ISSN 2436-6188, [https://doi.org/10.18979/jitrproceedings.37.0\\_181](https://doi.org/10.18979/jitrproceedings.37.0_181), [https://www.jstage.jst.go.jp/article/jitrproceedings/37/0/37\\_181/\\_article/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jitrproceedings/37/0/37_181/_article/-char/ja), 抄録



## 付録

## 1. 台湾研修プログラム旅程：2024年9月1日（日）～7日（日）（6泊7日）

	旅程	備考
Day1 9月1日 （日）	<b>【東京—台北】</b> 07:50 羽田空港（第3ターミナルAカウンター前）集合、 チェックイン 10:50 東京国際空港（BR189便）台北松山機場 13:30 台北松山空港からMRTにて松江南京駅、ホテルへ 15:00 ホテルチェックイン <u>*チャイナエアライン利用者以外は松山機場（13:30）かホテル</u> <u>（15:00）に合流してください。</u> チェックイン後から夜：市内見学、台湾茶体験、士林夜市など 希望に応じて行動 《宿泊：第一大飯店（住所 台北市中山区南京東路二段63号）》	・チェックインカウンターは8時過ぎにオープン （出発3時間前より） ・教員は9:40発ANA便 にて出発松山機場 12:10 着） ・松山機場にて両替、 SIMカード購入 台北泊
Day2 9月2日 （月）	<b>【台北：日系企業訪問—台南】</b> 09:00 ホテル出発（MRTで2駅） <u>10:00-12:00 日本台湾交流協会台北事務所</u> （臺北市松山區慶城街28號通泰商業大樓） 昼食（周辺にて）、移動（徒歩数分） <u>13:00-14:00 台湾丸紅股份有限公司</u> （臺北市中山區南京東路三段168号16F-1） 終了後移動（徒歩数分） <u>15:00-16:00 日商全日本空輸股份有限公司台灣分公司</u> （臺北市中山區力行里南京東路3段168號3樓） バスにてホテル前まで（3駅、10分程度） 松江南京駅より台北駅へ（約20分） 台北駅 18:51 発（高鐵0249列車）高鐵台南駅 20:17 着 沙崙駅 20:28 発（区間3772列車）台南駅 20:52 着 《宿泊：新朝代飯店（住所 台南市北區成功路46號）》	ホテルで朝食 ◎早川友久氏の講話 終了後、ホテルで荷物を 受け取りし台北駅へ。 台北駅にて夕飯購入。 台南泊
Day3 9月3日 （火）	<b>【台南】</b> 06:15 ホテル出発 06:29 発 台南駅（台湾鉄路区間車）善化駅 06:54 着 07:05 発 善化バス停（橙線バス）玉井バス停 07:49 着 08:00 マンゴー農家見学（小崇々果園）【予約完了】	◎台南（と安平）の歴史・観光のあり様を知る ◎マンゴー生産を見て、 新たな観光資源の可能性

	<p>農園見学（マンゴー生産を学び、マンゴーサンデー作り）</p> <p>玉井公有零售市場（マンゴー市場見学）、玉井讃氷店芒果氷（マンゴーアイス）、玉井北極殿</p> <p>10:45 発 玉井バスターミナル（グリーンライン）台南公園バスターミナル 12:20 着</p> <p>12:55 発 台南駅（台湾鉄路：区間車）長榮大學駅 13:12 着</p> <p>長榮大學訪問、見学</p> <p>14:53 発 長榮大學駅（区間車）台南駅 15:16 着</p> <p>赤崁楼（400 年前のお城）、大天后宮（台湾最古の恋愛の神様）、神農街（レトロな路地を散策）、林百貨</p> <p>夜：大東夜市</p> <p>《宿泊：新朝代飯店（住所 台南市北區成功路 46 號）》</p>	<p>を探索</p> <p>◎美食の町台南を味わう</p> <p>◎大東夜市</p> <p>台南泊</p>
<p>Day4</p> <p>9 月 4 日</p> <p>（水）</p>	<p>【台南—台東】</p> <p>06:20 発 ホテル出発</p> <p>06:43 発 台南駅（区間車 3127 列車）新左營駅 07:24 着</p> <p>07:43 発 新左營駅（区間快車 3053 列車）枋寮駅 09:07 着</p> <p>観光列車(藍皮解憂號)乗車手続き（9:30 までに駅横の藍皮意象館 BREEZY BLUE STATION にて受付）</p> <p>10:25 発 枋寮駅（藍皮解憂號）台東駅 13:25 着</p> <p>13:45 発 台東火車站（8117 番バス）台東轉運站 14:02 着</p> <p>ホテルへチェックイン</p> <p>台東中心街を散策（鐵道藝術村、海浜公園、台東糖廠文創園區、榕樹下米苔目で夕食？）</p> <p>《宿泊 台東凱旋會館（住所 台東市中山路 362 號）》</p>	<p>◎少数民族の存在を学び、その生活の一端を知る（観光列車）。</p> <p>◎台湾の鉄道旅行とその観光を知る</p> <p>台東泊</p>
<p>Day5</p> <p>9 月 5 日</p> <p>（木）</p>	<p>【台東】(本来の旅程)</p> <p>09:00 発 台東轉運站（鹿野高台[台灣好行]）布農部落[台灣好行]9:55 着 徒歩 8 分</p> <p>13:05 発 延平郷公所バス停（8168 永康）鹿野駅 13:18 着</p> <p>13:31 発 鹿野駅（自強號 423 列車）池上駅 13:51 着</p> <p>（池上弁当、客家文化区、池上牧野渡假村、伯朗大道画框）</p> <p>15:36 発 池上駅（区間車）台東駅 16:37 着</p> <p>16:45 発 台東火車站（8172 番バス）台東轉運站 17:00 着</p>	<p>◎台湾少数民族の生活を知る</p> <p>◎客家民族の文化を学び、その生活の一端を知る。</p> <p>◎台湾一の米どころ池上／台湾人のサイクリング</p>

	夜：台東（ホテルの近くに夜市あり） 《宿泊 台東凱旋會館（住所 台東市中山路 362 號）》	を味わう ◎地元民が集まる夜市も 見る
	<b>（実際の旅程）</b> 09:30 発 台東轉運站（8165 バス）池上 11:00 着 （池上弁当、客家文化区、池上牧野渡假村、伯朗大道画框） 14:29 発 池上駅（自強號 422 列車）台東駅 15:04 着 台東駅から台東轉運站へバス、市内散策 夜：台東（ホテルの近くに夜市あり） 《宿泊 台東凱旋會館（住所 台東市中山路 362 號）》	台東泊
Day6 9 月 6 日 （金）	<b>【台東—(南澳)—台北】</b> 09:00 発 台東轉運站（鹿野高台[台灣好行]）台東火車站 09:17 着 09:41 発 台東駅（自強號 415 列車）台北駅 14:01 着【購入済】 ホテルチェックイン 台北市内見学（または十分 OR 九份） 《宿泊：第一大飯店（住所 台北市中山区南京東路二段 63 号）》	台北泊
Day7 9 月 7 日 （土）	<b>【台北—東京】</b> 午前：台北市内見学（または十分、九分） 16:20 発 台北松山機場（BR190 便）20:20 着 東京国際空港	（教員は松山機場 16:50 発、羽田空港 20:50 着）

## 2. 参加学生の旅費

日付	項目	1 人当たり
航空券	東京国際空港（羽田）—台北松山機場 エバー航空利用（往復、往路 9 月 1 日/復路 7 日）	60,000 円程度
9 月 1 日	第一大飯店（台北ホテル 1 泊ツインルーム利用）	6,930 円
9 月 2 日	台湾高鐵（台北—台南間）	5,400 円
9 月 2 日	台湾鐵路（沙崙—台南間 25 元）	123 円
9 月 2 日	ダイナスティホテル新朝代飯店台南（2 泊ツインルーム利用）	7,940 円
9 月 3 日	マンゴー農家見学（小崇々果園）（1 人 250 元）	1,250 円
9 月 4 日	藍皮解憂號 乗車券 699 元（33,550 円）	3,355 円
9 月 4 日	台湾鐵路（台南—枋寮 158 元）	774 円
9 月 4 日	凱旋會館（台東ホテル 2 泊ツインルーム利用）	7,615 円
9 月 6 日	台湾鐵路（台東—台北間 783 元）	3,837 円
9 月 6 日	第一大飯店（台北ホテル 1 泊ツインルーム利用 12,666 円）	6,930 円
	（航空券含まず）合計	44,154 円

- \*バス、MRT などの移動は含まず。
- \*決算時のレートにて日本円を表示。

---

Accepted on 1 November 2024